関西自然保護機構会誌 *24*（*1*）：*57－58, 2002*

みんなで取り組む学校ビオトープ

滋賀県安土町立老蘇小学校　関　川　雅　之

School biotope built by everyone. Masayuki Sekigawa (*Oiso Elementary School*)

今の大人たちが小さい頃は小川や田んぼではいくらでもメダカやドジョウを捕まえたりすることができた。しかし，安土町という自然が豊かなはずの地域でも，田んぼの用水路はコンクリートで固められ，水は人工的に管理され水が必要なときのみ流れているという状態である。そのため，メダカやドジョウなどの生物に出合う機会が以前に比べると少なくなってきている。中でもメダカはレッドデータにあげられている。必然的に子どもたちが日常的に自然とふれあう機会は少なくなっている。自然の豊かさは，子どもの成長に必要なあらゆる要素を備えている。自然に接したり生き物に出合ったりした時の子どもたちは，目を輝かしている。子どもたちが学ぶ学校の敷地内に季節感あふれる豊かな自然を取り戻し，学校がより生きた学びの場所となるようにしたいと思った。そのため，老蘇小学校に学校ビオトープを創設して，学校内の景観を表情豊かで印象的なものにし，子どもたちにとってもさまざまな気づきの場となるようにしたいと考えた。学校，子ども，保護者そして地域が一体になって，身近な学区の自然を守り育てていきたいと思っている。

学校ビオトープは，地域本来の自然を考え，生き物や自然に触れながら学習していく総合的な学習として，多くの意義を持っている。学校ビオトープは，理科や生活料の授業はもちろん，算数（池の面積測定），国語（作文などの題材），社会（自然と私たちの生活のつながり），図工・音楽（表現活動の題材），道徳（生きものの命の尊さを学ぶ）などの授業，これらを複合した総合的な学習の時間やクラブ活動・委員会活動などの特別の時間にも活用されている。児童への学習効果および教師に対する再教育効果としてとして，1）子供たちが生きものや自然のしくみに興味を感じ，生命の大切さを知る契機の醸成，2）トンボやメダカなどの身近な生きものの棲める場の造成，3）学校と地域や行政とのパートナーシップによる環境保全活動の実践の場の確保があげられる。中央教育審議会答申（1998.6）で学校ビオトープの敷地内への設置が明言されたことから，各地で整備されていくことが予想される。以下に，老蘇小・学校ビオトープ設置実施内容メモを箇条書きに付記する。

［付記］1）設置場所：老蘇小学校プール東北側L字型敷地，約1000 m^2。2）目標生物：トンボやメダカのすむ池を中心としたビオトープ。アメリカザリガニ，アカミミガメ，ブルーギル，ブラックバス，コイ等は導入しない。ヤゴ，メダカが食べられてしまう。3）工事期間：平成13年9月23日（日）～平成14年3月［整地完成］。PTA原則毎週日曜日9時～12時。学級学年単位，募集ボランティアで作業にかかわる。13回程度児童各学級1時～2時間程度全学級がかかわる。4）老蘇小・学校ビオトープの特徴と今後の計画：①池の面積は約150 m^2（教室（7 m×9 m）の約

2.5倍）である。広い面積をとりさまざまな環境を作り出す。②池の底の形状に変化を付けている。水生生物の育成基盤をつくるため，（水生植物により，水深が変わる）石，砂，土などを使い分け，多様な生物が生息できるように多孔質空間を形成する。③池の水を小川を経由して循環できるようにしている。自動水中ポンプにより循環させる。④蒸発などによる水位の低下を補うための水の補給については，地下水をポンプアップしている。地下水位が高く10 mの深さで十分である。⑤水面の高さを一定にしている。植物帯（沈水，抽水，湿地）を安定させるため，また湿地植物帯に生息する生物や産み付けられた卵の保護のため。フロートにより水位を一定に保つ自動装置（自作）をつけている。⑥管理のしやすい池になるよう工夫している。増えやすい抽水植物や園芸的な抽水植物は直に植えていない。プランターなどに植えてから沈めている。⑦子どもが安全に観察できるようにしている。観察デッキを設置している。⑧全員参加の学校ビオトープづくりを行っている。学校（教職員＋児童），行政，PTA等，設計図とアイデアの募集，資材の提供，石（直径30 cm～50 cm程度），樹木の提供，教職員，児童の参加学校だよりによる情報提供。⑨ネットワークづくりを行っている。他先進校視察，連携他自然観察施設との連携保護者，自治会，自主グループとの連携行政，民間企業との連携。5）参考文献：ビオトープ教育入門（山田辰美編著，農文教），学校ビオトープ考え方つくり方使い方（日本生態系協会編著，講談社）。